

(紀・記)

景行の豊国とよくに進攻と

速津媛はやつひめの奉迎

一、はじめに

富 来 隆

大分県の古名である「豊国」の地名説話をもつ「豊後風土記」は、それだけで私たちに親しみやすいものがある。と同時に、「里芋の花が、冬に、咲く」瑞祥を、どのように解したらよいかに苦しめられるのも事実である。

「日本書紀」のほうは、山々にこもる族長たちへの凄絶な殲滅戦せんめつが記され、それがいかにも史実であるかのような筆法、これまたその解釈に苦しめられる。

しかも書紀と風土記とは、違いとともに共通にもみられることも多く、さらに地名の位置関係に誤っていることも目につくのである。これらのことが、私たちを悩ます大きな原因となっている。私も何度かアタックを試みてきたが、ようやく、一の解釈を得た思いがあり、しばらくそれについて記してみた。

大観して、まず気がつくことがある。それは、記述の仕方の一つのきまだった型(タイプ)がある、ということである。

- (1) 始めから天皇方に所属している地元の武将や神々がすでに存在していること。豊前進攻については「菟名手うなて」(書紀においては国東臣の祖とされ、風土記では豊国直の祖とされている)が居り、豊後進攻では直入郡のさいに、神々の名前がみえる。
- (2) つぎに天皇方が、豊前に進攻するさいには「神夏磯媛かみしほひめ」の帰順を得ており、豊後については「速津媛はやつひめ」の奉迎をうけていること。ともに沿海部の、女王が帰順し、その助言によって、山中部の敵対する首長たちを攻め滅している。しかも、どちらの女王も、その本拠がはっきりしないことで妙に一致している。
- (3) さらに山中部の

敵対した首長たちの名は、当然のこととして蔑称をもって記されているようにみえるが、ただそれだけではない。その奇妙な名前がはたしていかなる意味をもつのか、何かヒミツがかくさされているのではないのか。それおをはっきりさせることが、問題をとくカギとなるのではないのか、と思われる。

まず、立論の順序として、天皇方の豊前進攻から考えていきたい。

二、景行天皇の豊前進攻（書紀）

(1) 「日本書紀」大足彦忍代別天皇（景行天皇）

「十二年の秋七月に、熊襲反きて朝貢らず。八月の乙未の朔己酉に、筑紫に幸す。九月の甲子の朔戊辰に、周芳の装摩に到りたまふ。時に天皇、南に望みて、群卿に詔して曰はく、「南の方に烟氣多く起つ。必に賊在らむ、」とのたまふ。即ち留りて、先ず多臣の祖武諸木・國前臣の祖菟名手・物部君の祖夏花を遣して、其の状を察しめたまふ。

爰に女人有り。神夏磯媛と曰ふ。其の徒衆甚多なり。一國の魁師なり。天皇の使者の至ることを聆きて、則ち磯津山の賢木を抜りて、上枝には八握劍を掛け、中枝には八咫鏡を掛け、下枝には八尺瓊を掛け、亦素幡を船の軸に樹てて、参向て啓して曰さく、「願はくは兵をな下しそ。我が屬類、必に違きたてまつる者有らじ。今將に歸徳ひなむ。唯残しき賊者有り。一をば鼻垂と曰ふ。妄に名號を假りて、山谷に響ひ聚りて、菟狹の川上に屯結めり。二をば耳垂と曰ふ。残ひ賊り、貪り焚きて、屢ば人民を略す。是御木（木此をば開と云ふ）の川上に居り。三をば麻剝と曰ふ。潜在徒党を聚めて、高羽の川上に居り。四をば土折猪折と曰ふ。緑野の川上に隠れ住りて、獨山川の陰しきを待みて、多に人民を掠む。是の四人は、其の據る所並に要害の地となり。故、各眷屬を領ひて、一處の長と爲る。皆日はく、「皇命に従はじ」といふ。願はくは急に撃ちたまへ。な失ひたまひそ」とまうす。

是に、武諸木等、先づ麻剥が徒を誘る。仍りて赤き衣・禪及び種種の奇しき物を賜ひて、兼ねて服はざる三人を搦さしむ。乃ち己が衆を率て参来り。悉に捕へて誅しつ。天皇、遂に筑紫に幸して、豊前國の長峽縣に到りて、行宮を興てて居します。故、其の處を號けて京と日ふ。」

(2) 「豊後国風土記」 ○総記

「豊後の國は、本、豊前の國と合せて一つの國たりき。昔者、纏向の日代の宮に御宇しめしし大足彦の天皇、豊國直等が祖、菟名手に詔したまひて、豊國を治めしめたまひしに、豊前の國仲津の郡の中臣の村に、往き到りき。時に、日晚れて僑宿りき。明くる日の味爽に、忽ちに白き鳥あり、北より飛び来たりて、此の村に翔り集ひき。菟名手、即て僕者に勅せて、其の鳥を看しむるに、鳥、餅と化爲り、片時が間に、更に、芋草数千許株と化りき。花と葉と、冬も榮えき。菟名手、見て異しと爲ひ、歡喜びて云ひしく、「化生りし芋は、未曾より見しことあらず。實に至徳の感、乾坤の瑞なり」といひて、既にして朝廷に参上りて、状を擧げて奏聞しき。天皇、ここに歡喜び有して、即ち、菟名手に勅りたまひしく、「天の瑞物、地の豊草なり。汝が治むる國は、豊國と謂ふべし」とのりたまひ、重ねて姓を賜ひて、豊國直といふ。因りて豊國といふ。後、兩つの國に分ちて、豊後の國を名と爲せり。」

a 景行天皇の御名を書紀においては「大足彦忍代別天皇」とされ、風土記においては「大足彦天皇」とされている。タラシ(足)が、古事記においては「大帶日子」と「帶」の字を用いている。タラシが尊号であることについては、すでに先人の述べられているとおりでであるが、私はこれを、「忍代別」の「別」(ワク・ワケ)と同様に、朝鮮語によって理解したいと思つている。

「別」(ワク・ワケ)が朝鮮語の Wang = 「王」の音写ということに異存ある者は居るまい。そして、それと同じく

タラシもまた朝鮮語の Tangwathia = 「そびえ立って高い」の音写なのではないか。「天皇」の尊号にふさわしいと思う。

b 書紀と風土記との両書に出てくる「菟名手」の名もまた、これを朝鮮語で理解されるのではないか。それによってこそ「菟名手」という名の実体が浮かんでくると思われる。さいわいに、ウナテが、書紀のなかに幾ヶ所も記されている。―それは人名としてではなくて「大溝」と記されていることであるが―。代表的な事例として、つぎの二例をあげておく。

○神功皇后 攝政前紀（仲哀天皇九年四月―九月）（日本古典文学大系による） 「既にして皇后、則ち神の教の驗有ることを識しめして、更に神祇に祭り祀りて、躬ら西を征ちたまはむと欲す。爰に神田を定めて佃る。時に、儼の河の水を引せて、神田に潤けむと欲して、溝を掘る。迹驚岡に及るに、大磐塞りて、溝を穿すことを得ず。皇后、武内宿禰を召して、劍鏡を捧げて、神祇を禱祈りまさしめて、溝を通さむことを求む。則ち当時に雷電霹靂して、其の磐を蹴み裂きて、水を通さしむ。故、時人、其の溝を号けて裂田溝と曰ふ。」

○仁德天皇 十三年十月―十七年九月（同書による） 「十四年の冬十一月に、猪甘津に橋渡す。即ち其の処を号けて、小橋と曰ふ。是歳、大道を京の中に作る。南の門より直に指して、丹比邑に至る。又大溝を感致に掘る。乃ち石河の水を引きて、上鈴鹿・下鈴鹿・上豊浦・下豊浦、四処の郊原に潤けて、墾りて四方余頃の田を得たり。故、其の処の百姓、寛に饒ひて、凶年之患無し。」

神功紀の記事については、筑前国・筑紫郡内の（旧那珂郡）迹驚岡のこととして、吉田東伍博士「大日本地名辞書」所引の「続風土記」に、つぎのように記されている。裂田ノ溝あり、雷のとどろき落ちて溝を開きし所なれば、とどろきの岡と名付けしこと神功后紀に見えたり……其掘たる大溝は岸より水面まで所により五六間四五間、水の深さ二尺五寸或は二尺ほどあり、溝の広さ一間半或は二間あり、広く深くして且つ長く、人力の容易く及ぶ所に非ず、是ら

みな神功皇后の時掘らせ玉へるなるべし。」

つぎに仁徳紀の「大溝」は、大阪府羽曳野市にのこる「古市大溝」だとされる。「五〇六世紀に造られた最古の運河」であるとされ、「東アジアの古代文化」24号によると、「同大溝は、古墳築造の物資運搬とか、農業用水路として利用されたと考えられる。巾二〇メートル、現存している延長は二二〇メートル、当時は数キロにわたっていたものと思われる。深さは五〇七メートルに及ぶ」と。

ウテナが右のように「大溝」の謂であるとすれば、書紀・風土記にみえる人名「菟名手」の実像が見えてくる。ウテナは、朝鮮語の *u: nha · tse* Ⅱ 運河堤の音写と考えて間違いないまい。

ところで、前の「神功皇后と武内宿禰との関係」に似た語として、琵琶湖北の余呉ノ湖の干拓、また甲府盆地の話などがある。また阿蘇明神が盆地を蹴りひらいた話もある（吉田東伍博士「大日本地名辞書」参照）。当地では、大分川源流の由布院盆地に「ウナギ姫と、蹴裂権現と」の伝説が存している。由布院盆地はもと湖であったのを、ウナギ姫が権現に命じて、その一角を蹴裂かせ、大分川に流れさせたといひ、いま盆地の西南端に権現が祀られている。数百メートルの河道がまっすぐに掘り拓かれており、たしかに大溝を想わせる広さ・深さを思わせる。ウナギ姫のウナギとは、朝鮮語での (*ungdongyŏ*) Ⅱ 「留池」の義の音写かと思われるが、あるいはまた (*u: nha · ke*) Ⅱ 「運河・川」の義であろうかとも思われる。

そのほか、ウナデ神社がある。一言ふれたい。

豊後・速見郡の山香町の南端（日出町との境域）に「常堤水神社」がある。八坂川本流の水源である。祭りには、山香町・日出町および杵築市の一部から「井手係りが集まって、その水を汲んで帰る」（「山香町誌」）とのこと。ここにも水路の清水との関連が示されている。

著名なものとしては、大阪の住吉神社の祭礼に、畝傍山口神社に「埴採り」に行く神事があり、その途中で雲名梯

神社にて身を淨め、装束を着かえるとされている（西本泰『住吉神社』）。ここにも清水との関係があるようである。

C 景行天皇だけでなく、菟名手の名が、朝鮮語で理解されるということは大変なことである。ことにウテナが単なる人名ではなく、その実体が「大溝」（朝鮮語での「運河堤」の義の音写）を意味するものだとすると、書紀にみえる他の二人の武將、武ノ諸木（多の臣の祖）・夏花（物部君の祖）についても、これを朝鮮語での理解を試みる必要があろう。「武」（タケ）が朝鮮語（tak）＝「竜神」の音写であること、山名の嶽・岳、人名の武、また竹（鞍馬の竹伐りの神事あり）などが、この tak（竜神）を表現するということは学界の常識になっていることからしても、当然この試みがなさねばなるまい。

このばあい、モロキ（諸木）とは、朝鮮語（モロキ）＝「水路」の音写であらう。「武ノ諸木」とは「蛇神の作った水路」という意味となり、これでウナデ（大溝、運河）との釣合いがとれる。その伝でいくと、ナツ・ハナとは（nat）＝「ナタ・鎌」と、（hangari）＝「カメ・ツボ」ということになる。この名は「物部ノ君の祖」とされているに相応わしいと思う。製鉄業や窯業などにかかわる技術工人を意味することにならう（畑井弘氏「物部氏の伝承」、また拙稿「国東半島の地位」大分大学・教育学部刊「国東半島」所収、を参照されたい）。

そして、前者（武ノ諸木）の「蛇神の水路」については、時代が下って平安末期、保元元年（一一五六）のこととして、宇佐大宮司が、ある時「夢にお告げがあり」「白蛇の通ったあとを辿れば水路ができる」とのことによって、そのあとを辿り、今日の平田井路のもとが作られた、とされている（「大宇佐郡史論」）。これは、いわゆる神話の再生とよばれるもの、書紀にみえる「武ノ諸木」の伝承が、のち大宮司公通にくっついて変身し、再生したものである。「物部君の祖、夏花」については、今日、大分・福岡県境の豊前・山国川の上流に、「物部」・「井福」・「金吉」の地名もあり、採鉱あとも伝えられている。対岸（西）には近年まで「草本金山」が活動していた。書紀におけ

る「一所之長」の「耳垂」の蟠居していた地方でもある。

さてこうなると、書紀にみえる(天皇方)三人の武将たちの名前は、これを朝鮮語によってたずねるとき、(1)現在の舟運等の運河の用をはたしているウナデ、(2)井路・用水路たるモロキ、さらに、(3)農業に必要なナタ(鎌)とツボ・カメを示すナツ・ハナ、これら三人の実像は、このようなものであったのである。

結論を出すまえに、もう少し先を考えてみたい。

(3) (豊前) 一国の魁師、神夏磯媛

さきに引用したように、書紀では、景行天皇が周防の沙婆津まで来たとき、南方を望むと、海を越えて向うに煙の立つのが見えた。そこで、武ノ諸木・菟名手・夏花をして様子を見させた。

ここに女人あり、神夏磯媛。一国の魁師である。賢木に、八握ノ劍・八咫ノ鏡・八尺瓊をかけ、素幡を舟の舳に立てて参向し、帰順の意を表した。

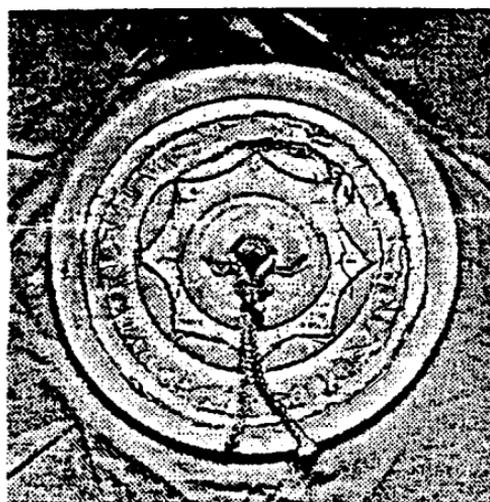
① 姫の名について考えると、(i)「神」字を用いていること。これは天皇の名においてさえ、神武・崇神・応神、また神功皇后など、ごく少数に限られている。皇子においても景行の皇子神櫛皇子などである。いわんや敵方の地方首長に「神」字が用いられるなど、まったく例外である。(ii)「夏磯媛」(カシヒメ)の名で呼ばれることである。神武

天皇の征戦記事には「伽辞離」の呪術が用いられている。これは「天神地祇を祭って、人を呪詛するを云う。神功皇后は朝鮮への出兵で、檀日で神託されたことである。神武の即位が檀原(カシ・ハラ)で行なわれ、神功の神託はカシ・イである。カシとは、伽辞離(カジリ)からの略であろう。そうすると「神」字のついた夏磯媛(カシ・ヒメ)というのは、神功皇后のような、カジリの女王という意味に相違ない。

② だから姫を「一国之魁師」として、他の賊長たちを、「一所之長」たちとする者の上位にしていることである。

他の地の首長たちが「土蜘蛛」と蔑称されていることからすれば、その表現に格段の差がある。他には、ただ南九州の主魁とされた熊襲タケルだけが、「渠師たけら」あるいは「魁師ひまのひらみ」と記されているだけである。神夏磯媛を、豊前連合王国の長たるカジリの女王として、神の字をもって尊称したものと解されるだろう。

③ 媛の奉献した剣・鏡・玉（これは祭祀権の献上、すなわち政権の捧呈、帰順を意味する）のうち、他の例と異なつて「八咫鏡」と記されていることである。



八咫鏡は、天皇位のしるしとされる宝鏡（白銅鏡）に対する特殊の呼称であり、それが此所にもみ記されているのである。三種の神器の一たる八咫鏡、それについて福永光司氏は「内行文鏡」であろうとされる（『道教と日本分化』）。ところが、のちの宇佐八幡宮の放生会に、遠賀川域の香春銅山で作られた銅鏡が、古宮八幡宮から奉納される。この神鏡も、同じく内行文文鏡なのである。とすれば、神夏磯媛の捧呈した「八咫鏡」とも同鏡ということになる。この一文、まことに驚くべきことと言わねばならない。

大胆な推測をすれば、天孫降臨の八咫鏡、伊勢神宮の宝鏡、そして書紀で卑弥呼に擬せられる神功皇后をまつた宇佐神宮への宝鏡なのであるから、これこそが、卑弥呼にたまわった魏からの鏡に比定されるべきではないだろうか。和製の三角縁神獸鏡とは、全くその質的価値が異なるとされよう。このこと、あらためて一考を要しよう。

④ 景行天皇が、娑婆さばノ津から南を望んで、「南方に烟の立つの見える」と仰せられ、そして神夏磯媛（じつは豊

ある。西南三十度を逆にみれば東北に三十度の線である―夏至の「日の出」の線と、冬至の「日の入」の線になる―太陽王である天皇の行動が天道の線で示現されたのである。天皇のカリスマ性の表現に他ならない。

(4) (豊前) 山中の「一所之長」たち

(豊前) 一国の魁師くわいしたる神夏磯媛が帰順して、残るは山中(川上)に蕃居する四ヶ所の「長」たちである。

一は宇佐川上の「鼻垂」(妄に名号を仮る、と記される)

二は御木川(いまの山国川)の「耳垂」(これも垂)

三は高羽(いまの田川郡)の川上に居る「麻剥」

四は緑野の川上(いまの紫川とされる)の「土折猪折」

(1) これら四所の「長」たちの名が、蔑称をもって記されていることは、他のばあいと同様である。だが、これが如何なる意味をもつかについては、これまで一向に明らかでなかった。

茲に、大胆な試みであるが、天皇方の三人の武將たちの名前と同じように朝鮮語で考えたらどうなるか、について私見を述べてみたい。ただ蔑称というだけでは、これらの名前の本当に意味するところが全く分からないからである。菟名手や諸木らの名が朝鮮語で理解されることによって、全く思いもしなかった知見が開かれたと同様に、これら四人の名もまた朝鮮語で、新しい知見が開かれるかも知れないからである。

宇佐川上の「鼻垂」、山国川上の「耳垂」、どちらも見える「垂」の字が、天皇の尊号と同じく「タラシ」だということは、書紀自身が記している。とすれば、問題は「鼻」と「耳」である。

ここで思い出すのは、古事記に、スサノヲ神が大ゲツ姫を殺したときその身体から穀物が生なった、という記事である。しかし、これは、書紀でウケモチの神の死体から牛馬や穀物が生まれたという記事が、うまく朝鮮語と対応しているの

と比べて、古事記のほうは必ずしもうまくいってない。しかし、右のことは参考になり得る。

さて「鼻」というのは (kno) であり、「耳」というのは (ky) である。さらに三の「麻剥」というのは sam-kut であり、(ku) には「抗・穴」という意味がある。(sam) によく似た音の語をさがせば、(sa:) = 砂、(so:) = 鉄、(tam) = 丹などがある。(kut) を抗穴として、soi = 鉄あるいは tam = 丹と結びつけて考えることができる。

そうとすれば、「鼻」の kno に似たものとして (kheba) = 「掘る・明かす」があり、「耳」の ky には似たものに (kita) = 「腹這う、這う」がある。「鼻」・「耳」が抗穴を「掘る」ということに類音があり、「麻剥」が鉄あるいは丹の抗穴ということになるとすれば、これらはみな鉾山採掘（山師）の表現に他ならない。

とすれば「土折猪折」とは何か。土や猪が蔑称の文字だとして、折とは何だろうか。日本語の発音でも、オルは、ホルによく似ている。「折」が「掘」の類音だと考えれば、じつはよく分かることになる。「土」（ツチ）は (tang) であり、これは (tam) = 「丹」、また (tong) = 銅、ときわめてよく似る。「猪」（チヅ）は (tau) (鉄) と似た類音である。

右の四人の名前、いずれも鉾穴、また丹・鉄・銅などと類音する人名であることが明らかとなる。しかも豊前のこれらの地方、川上には、香春銅山だけでなく、佐井川（この音写）、大入（入は丹生）、赤（砂鉄・酸化鉄か）などの地名がある。山国川上流には「伊福」（息吹）・「金吉」（かぎし）の地名のほか、草本金山まである。この地方一帯すべて有数な鉾山地帯なのである。

(2) 最後に、「武諸木ら、まず麻剥が徒を誘る。仍りて、赤き衣・禪及び種々の奇しき物を賜ひて、兼ねて服はざる三人を搦さしむ」という記事のことがある。

これは古くは「魏志倭人伝」にもみえるような「丹朱を身体に塗る」から発展したものであろうか。「丹朱」に対する信仰ともいうべきものであろうか。「播磨風土記」（逸文）に注目すべき記事がある。「息長帯日女尊、新羅の国を

平げむと思して」「此に赤土を出し賜ひき、その土を天ノ逆棹に塗りて神舟の艫舳に建て、又御舟の裳と御軍の着衣を染め」渡海されたのである。

別府市浜脇の古社たる住吉宮の扁額に、ホーアンエイの彩色画がある。船首に立つ裸者が、赤い禪と赤い羽織（肩回し）をつけている様子は、右の神功皇后・渡海の記事を偲ばせる。

また豊後水道域の佐伯地方には、最近まで漁民の習俗として、中学生の男子に、伯母から「赤ベコ渡し」の行事（へコは禪のこと）が残されている。このことについては、拙著「卑弥呼」に詳記した。

こういう海士たちが、山に入っては渡航の伐木や採鉱の業に従事していることは、歴史時代（源平争覇のころ）、豊後の大神氏一族、ことに緒方惟栄らの活動にも見られる。

そういう眼でみれば、書紀の、川上の「四所の長」たちは海人族たちをふくめた、採鉱に従事していた山人族たちの長であったことが理解されよう。

このことよって考えると、天皇方から「赤い衣・禪など」賜わった、という一文は、じつは少なくとも和睦の意思を示したとされるべきであって、「捕えた」というのは、明らかに一流の詐術である。書紀は、これをしもなお、天皇のクリスマ性の一表現として、誇示しているのである。

三、芋の花が冬に咲く、瑞祥（豊後風土記）

書紀における、景行の豊前進攻について、長々と述べてきた。このさい、人名の理解を、朝鮮語を媒介することによって、一文の内容がまったく新しいものとなった。新しい知見がひらけた。

一は水田農業における運河・水路や、鎌・ツボなどの技術をさし、一は銅・鉄・丹朱などの鉱山（採鉱・冶金）の技

術を示していることになった。

右の新知見が、はたして風土記の地名説話（瑞祥）に、どのようにして結びつくのか。単なる荒唐の物語り、説話とは思われない（という私の思い）からである。

ここでさらに、風土記の文をもまた、朝鮮語を媒介して考えらるとうなるか。この点を、あらためて問い直す（試みしてみる）必要がある。じつに幸いなことに、「大分の朝鮮文化を守る会」の吉川敬三郎氏に、半島での体験と知識とから、大変な助言をいただいた。

「サト芋」は (thoran) というのが正しい、とのこと。とすれば、タロ芋→トランとなったものであろうし、サト芋はタロ芋なのだから、thoran (サト芋) はまさにその通りだ、と理解した。

つぎに「鉾山」は、「露頭の鉾石」を見付けることであり、いわゆる日本の見立山みたち、見立鉾山と同じく考えられ、これを朝鮮語で (thorok) とよぶのだ、とのことであった。

「見立て」と同じように、トロクという鉾山もともに祖母山の南にある。成程と思った。そうすると、芋（トラン）と鉾山（トクロ）とは、これは類音として間違ひなく妥当である。できた。

そこで「冬」を「トウ」の発音のほうで考えると (tong) とあり、この「トング」 tong は「銅」と全く同じである。そこで「冬」を「トウ」の発音のほうで考えると (tong) とあり、この「トング」 tong は「銅」と全く同じである。花が咲く = Phida = 掘る、である。うれしい限りである。なにも彼もピッタリである。

その前にある「白鳥の飛来」することについて、「鉄山秘書」などに「金屋子神が、白サギに乗ってきた」伝承のあることを思いあわせれば、これも解ける。「白鳥と鉄神」との関係は日本だけでなく、中央アジアから世界的にひろがっているという（「鉄」社会思想社）。

「餅」 = tok であり、tak = 竜蛇神である。さらに、「宇佐託宣集」に「靈蛇、化鳥」とあり、八幡神は竜蛇神であり、かつ、鉾神でもある。

これによって分つたことは、「風土記」の一文は、じつは「日本書紀」における「豊前の山々」に拠つた鉾山王たちの活動（鉾業文化）を、そのまま寓話化したものであることになる。これが「豊後風土記」の白鳥や餅や、里芋の花が冬に咲く、瑞祥（地名説話）の本来の真意であつた、ということになる。

景行天皇の九州西征（書紀）も、サト芋が冬に花咲く地名・瑞祥（豊後風土記）も、それは偉大な天皇カリスマ性の賛歌にはかならない。

しかし、もう一つ、中臣氏（藤原氏）の賛歌ということも付け加えなくてはならない。風土記の豊国（地名）の瑞祥が、仲津郡の中臣村での出来事だということである（この地名は、幻の地名である）。

- (1) 書紀で、神武天皇の御東征に供奉した天種子命（中臣氏の遠祖）が、豊前のウサで、ウサツ姫を妻にしたこと。
- (2) 風土記で、豊国の地名・瑞祥が、（幻の地名である）中臣村での出来事とされること。
- (3) さらに書紀で、同じく景行天皇の豊後・直入で土蜘蛛を討つとき、物部神などと併せて中臣ノ神に祈つた、とされていること。

右の三つをみれば、豊前・豊後の地は、中臣氏にとって、その功業を誇る賛歌として演出されたもの、と言つて過言ではないだろう。

四、豊後への進出

― 速津媛の国 ―

豊前から豊後にうつる。まず早津媛の名のみえる史料を左にかかげる。

冬十月に、碩田國に到りたまふ。其の地形廣く大きにして亦麗し。因りて碩田と名く。碩田、此をば於保岐陀と云ふ。速見邑に到りたまふ。女人有り。速津媛と曰ふ。一處の長たり。其れ天皇車駕すと聞りて、自ら迎へ奉りて諮して言さく、「茲の山に大きな石窟有り。鼠の石窟と曰ふ。二の土蜘蛛有り。其の石窟に住む。一をば青と曰ふ。二をば白と曰ふ。又直入縣の禰野に、三の土蜘蛛有り。一をば打サルと曰ふ。二をば八田と曰ふ。三をば國摩侶と曰ふ。是の五人は、並に其の爲人強力くして、亦衆類多し。皆日はく。「皇命に従はじ」といふ。若しあながちに喚さば、兵を興して距かむ」とまうす。(中略)是の時に、禊りまつる神は、志我神・直入物部神・直入中臣神、三の神ます。

(豊後風土記、速見郡)

昔者、總向の日代の宮に御宇しめしし天皇、球磨ソ於を誅はむと欲して、筑紫に幸し、周防の國の佐婆津より發船して、渡りまして、海部の郡の宮浦に泊てたまひき。時に、此の村に女人あり、名を速津媛といひて、其の處の長たりき。即ち、天皇の行幸を聞きて、親自ら迎え奉りて、奏言をししく、「此の山に大きな磐窟あり、名を鼠の磐窟といひ、土蜘蛛二人住めり。其の名を青・白といふ。又、直入の郡の禰野に土蜘蛛三人あり、其の名を打サル・八田・國摩侶といふ。是の五人は、竝に爲人、ち暴び、衆類も亦多にあり。悉皆、誑していへらく、「皇命に従はじ」といへり。若し、あながちに喚さば、兵を興して距ぎまつらむ」とまをしき。ここに、天皇、兵を遣りて、其の要害を遮へて、悉に誅ひ滅したまひき。斯に因りて、名を速津媛の國と曰ふ後人改めて速見郡と曰ふ。」

天皇方の進攻が、豊前から豊後にうつると、まず主役は神夏磯媛から速津媛にうつる。

はじめに記したように、どちらも沿海部の女王であり、しかも両者ともその所在がはっきりしないのである。いちお

う速津媛のほうは、速見邑（速見郡）とされているが、それにも拘わらず、やはりはっきりしないのである。

本稿のうちで、私はいくつか大胆な推測を記してきたが、ここでも思いきった推断を下すことが許されるならば、媛の所在を「佐賀ノ関」とし、媛の名は「速吸日女（速吸ノ門の媛の意）」であり、そのつづまったものとして「速津媛」となったものではないだろうか。そして、そのことが、さらに「速見」の地名に一諸にまぎれこむに至ったのではないかと、という思いをすてきれないのである。

その理由を左に記す。

その一は、書紀において、天皇の進攻が、「碩田国に到り、ついで速見邑に至る」とされること。碩田は国で、速見は邑。まるで国のなかの一つの村のようであり、進攻の順路も奇妙となる。しかも、この村の媛が直入郡のことまでも奏言する。これを整然と説明するにはどうしたらよいだろうか。

そこで第二に、風土記をよむと、媛の所在は海部郡の宮浦とある。これは神武天皇の東征のさいの、佐賀ノ関の日向泊のことであろう。内海潮流（交通路）から言っても理解できる。だがそれだけではない。さきの地図の天道線からもスムーズに説明ができるのである。

すなわち、第三の問題として「天道線」を考えたい。景行天皇が周防の装婆ノ津（防府）から西南に三十度の線にのって、九州に京都郡にたつする―その先は、「天道」の地にとどく―。そこから東南に三十度の線にのると、中津の海岸（豊日別宮あり）をすぎ、宇佐宮をすぎて、日出・杵築の境である八坂川口をすぎ、別府湾をよぎって、佐賀ノ関の日向泊（風土記の海部郡・宮浦の地）にたつする。そして、そこからさらに西南三十度の線にのると、直入郡の城原（この八幡に景行帝をまつる）にたつすることになる。天皇は、太陽王である。であるからこそ、天皇の進攻路が、そのまま天道線（三十度の連続）として示されるということが、天皇のカリスマ性の象徴となる。合理的に、まことにスムーズに説明できるのである。

天皇は太陽王・カリスマであるから、この天道線にのって、進攻をつづけたと解して、おそらく誤りないであろう。神武の東征以来、太陽王権としての天皇、その思想的表現の一文だと解されるのである。

天皇の進攻路のことは、以上で理解できた。つぎに在地の主長たち（速見の青・白と、直入の打サル・八田・国摩侶と）五人の名前について考えをめぐらしたい。

（書紀・風土記ともに）速津媛の奏言があり、それによると、此の山に、鼠ノ石窟あり、二の土蜘蛛が居る、青・白といふ、とみえる。さきの豊前のばあいと同様に、これらをまず音読みで解し、さらに朝鮮語の類音で考えてみる。すると、ソ・セイ・ハクとなる。ソは so 〓 「小さい」の義となり、セイは sei 〓 「鉄」と考えられ、宛て字として副・添・佐井・才などの地名がある。ハク（パク）は、風土記の豊国地名説話にも記されているように、Pag → tak 〓 竜蛇神・鍛冶神の義となる。青・白ともに金属鍛冶の主長たちを指すことになる。とすれば鼠ノ石窟とは「小さい岩穴・坑穴」という意味になろうか。

そこで、「此の山」とは、おそらく日出町と山香町境の鹿鳴越の周辺ではなからうか。というのも、その南麓に「猪狩」（また碇とも）の地名あり、西には唐木山あり、北の麓には鍛冶屋坊の地名がある。カリ・カラは古代朝鮮語の「銅」（のちカネに拡大）の義である。これからすれば、鹿鳴越とは「金越」なのではなからうか。速見の山中部である。

さらに次の直入郡の三土蜘蛛なる打サル・八田・国摩侶の名前については、先年「卑弥呼」（頁一〇五以下）に記したとおり、サル神族・ヘビ神族・犬神族の義と解されよう。やはり鍛冶・農耕の主長たちなのである。

豊前のばあいと全く同様と考えてよいだろう。そしてさらに、ここにも天皇方に活動した志賀神・物部神・中臣神の名がみえる。中臣氏（藤原氏）の功業の説明となっている。

以上で、豊後の山中の主長たちの説明を終える。これによって、明らかにしたこと、すなわち景行の進攻の特色を

まとめてみることにする。

五、むすび

景行天皇の九州進攻をみると、豊前とへの進攻が、（地名や人名は変るけれども）、ともに同一の型のクリ返し、ということが明らかになった。

書紀・風土記によって考えるところに、全く同様の構造をもって、天皇の進攻が記されていることを知るのである。

それは、①地元ですでに天皇方の味方がいること。②沿海部の、女王が奉順し、抵抗する主長たちを教えること。

③山中部の主長たちは抗戦し、全滅させられること。当然のこととして彼等の名前は蔑称をもって記されていること。

④山中の主長たちの名から、いずれも銅・鉄などの金属鍛冶の技術集団の長であることが、朝鮮語を媒介することでも明らかとなったこと。

さらに、最大の特点是、天皇が太陽王・カリスマであり、その主張を説明するために「天道線」にのった進攻とされていること。

最後に、中臣氏（藤原氏）の功業を賛える一文となっていることが注目される。風土記の豊国地名説話が、中臣村（これは幻の地名である）における辛の花の瑞祥とされ（豊前）、次で直入において中臣神が天皇方を支えたとされること（豊後）である。

天皇のカリスマ性と、中臣氏の功業の賛歌こそが、最大の眼目であり、そのために豊前と豊後とで同一の型をもって（クリ返し）、物語りが展開されているのである。